

## 一人多い家族

作 山本正典

登場人物

佐藤さん（劇中「佐藤」サトウ）  
佐藤聡子1（劇中「聡子1」サトコワン）  
佐藤聡子2（劇中「聡子2」サトコツ）  
佐藤聡子3（劇中「聡子3」サトコスリー）  
佐藤聡子4（劇中「聡子4」サトコフォー）  
お医者（劇中「お医者」オイシャ）

佐藤家。居間には大きなテーブルがあって、椅子が六脚。そこにみんな座っている。佐藤とお医者、聡子1、2、3、4の四人の姉妹を見守っている形。四人の姉妹。世界人口が一人減ろうが増えようが、教室の生徒が一人減ろうが増えようが、それは日常によくある光景であって、この今、居間、三人姉妹が四人の娘によって現出している状況に比べればどうということはない。お医者は、初めて足し算を教えられている二歳児のように目を見開いて、もう一度、姉妹の数を数えなおしたところであった。はじまる。

佐藤 妻に先立たれて 娘たちもそれぞれ相手を見つたり仕事の都合でだったり この家を出ていって ずいぶんと長いこと私一人で暮らしてきました それが一週間ほど前でしょうか なんの連絡もなしに上の娘が帰ってきたんです 理由を聞いても濁して答えてくれんです これはさては旦那さんと何かあったのかしらと思って 深く詮索するのはやめたんです それから一日二日経ってまた一人帰ってきたんです 連絡もなしにです こいつは普段からまめに連絡をくれる方で 突然に家に帰ってくるからにはさては何かあったんでないかと思っ て深く詮索するのはやめたんです そしてすぐに三人目も帰ってきましたんです これはそうか娘らの中だけで何か相談事もあるんでないかと思っ て父親としては深く詮索するのはやめたんです したら案の定四人目も帰ってきたんです ほうらやっぱりってもうこの時になると何か事情があつてだとかそんなんでなくてもう たただただ久しぶりに四人の娘が帰ってきて家が賑やかになったことが嬉しくて深く詮索するのはやめたんです 私がどうかしてたん です 四人の娘で ないんです 私に娘は三人しかいないんです 一人多いんです 先生

お医者 はい

佐藤 何人に見えます

お医者 四人です

佐藤 先生

お医者 はい

佐藤 三人姉妹なんです

お医者 三人姉妹ですか

聡子1 三人姉妹の長女の聡子1です

聡子2 三人姉妹の次女の聡子2です

聡子3 三人姉妹の三女の聡子3です

聡子4 三人姉妹の四女の聡子4です

お医者 あなた方

聡子たち はい

お医者 何人姉妹ですか

聡子たち 三人姉妹です

お医者 あなた方今何人でしょうか

聡子たち 四人です

お医者 息が

佐藤 はい

お医者 びつたりですね

佐藤 姉妹ですから

聡子たち 姉妹ですから

佐藤 お前たち

聡子たち はい

佐藤 息はあわせるべき時にあわせなさい

聡子たち はい

佐藤 今はあわせなくていいんだよ

聡子たち はい あ（あわせちゃった）

佐藤 ただでさえお前 お父さんは混乱のはちぎれる寸前だのにお前たちがそんなロボットのような話し方じゃあなあ おい

聡子たち ごめんなさい あ（あわせちゃった）

気まづくなった。それは家族が家族の絆を確かに認めているからこそ訪れたそれはそれは重たい空気であった。お医者はさすがにその道のプロなので心得ている。一同を見渡して、たっぷりと言った。

お医者 わかりました

佐藤 わかりましたか

お医者 ええ お父さん

佐藤 はい

お医者 この中に従妹が混じっているんでしよう

佐藤 え 従妹

お医者 従妹です

佐藤 いえ先生正真正銘この子らは私の娘です

お医者 長年人の神経を見るお医者として勤めてきましたがね こんなのにはつきりと なんとというかお父さんの はたまた娘さん方の妄想の実体が赤の他人である私にも見えているというの はね 稀ですお父さん 稀というか初めてのことなんですお父さん ね 従妹が混じっているんだ

佐藤 混じってやいませんよ そんなことをしてわざわざこうやって

お医者さまざま呼びつけて私に何の得があるんです

お医者 それは聡子さん

聡子たち はい あ（あわせちゃった）

お医者 あ いえ 一番上の あ

聡子1 長女の聡子1です

お医者 聡子1さん お父さんはなぜ私を 神経を見るお医者と呼んだのでしょうか

聡子1 なぜって娘が増えたんです 増えた娘に心を乱すことや乱した心をお医者さまに治して頂こうとするのは当たり前のことだと思えます

お医者 それなら聡子さん

聡子たち はい あ(あわせちゃった)

お医者 あの はい 聡子2さん

聡子2 はい

お医者 この中に見覚えのない顔があるでしょう

聡子2 ありません

お医者 もしくは従妹がいるでしょう

聡子2 おりません

先生 あなたはぜひぶんと長い間 この家を離れて暮らしてしましたね

聡子2 はい

先生 たとえばこの聡子3さんとは何年ぶりの再会でしたか

聡子2 五年と少し

先生 五年と少しも経てばずいぶんと様子も変わっているんでないですか

聡子2 はい もうどちらがお姉さんなのか分からないくらい すっかり大人になって 私嬉しくて

先生 すっかり様子が変わっているのになぜあなたはこの人があなたの妹だと分かるんです

聡子2 それはだって先生はご兄弟はいらっしゃいません

先生 妹が一人いますね

聡子2 だったらお分かりになりません 兄弟の空気というの かけがえない絆というの

先生 うちはそのなりに仲の良い方ではないんです

聡子2 はずっと、両掌を自分の胸の前で揃えた。お医者是不意をつかれて身体をこわばらせた。聡子2のウタ。

聡子2 わたしたちはー  
聡子1、3、4 ことり ことり  
聡子1、2、3、4 ことりー

お医者 なんですか今の呪文  
聡子3 先生 私中学生の頃 うまく部活動に馴染めなくて虐められてたんです 毎日が辛くなって それでも不器用なものだから私誰に

何を言われても学校へ通うことしか思いつかなかったんです そしたらお姉ちゃんたちがこの歌で励ましてくれたんです 私この歌のおかげなんです 高校でも大学でも就職しても彼氏の友達にだって私は相変わらず馴染めないけれど 気持ちが落ち込んだ時はこの歌をうたうんです 私たち姉妹はいつも一緒にいるんです

お医者 従妹も一緒にいるんでしょう

聡子3 従妹は一緒におりません いらない おりません いらないわですわ

聡子3は両手で顔を覆った。肩を震わせて、声を出さずに泣いた。  
聡子1、2、4はまた声をあわせてウタった。

聡子1、2、4 わたしたちはー ことり…

佐藤 先生

お医者 いや 申し訳ない 聡子3さん 皆さんも 私は何も本気で従妹がどうか言っているわけではありません あなた方の仰ることを信じていないわけではないんです これは揺さぶりなんです 真実と虚実をより分ける為に必要なことなんです

佐藤 真実と虚実とはなんです

お医者 真実とはお父さんの娘さん方は三人姉妹だということですが 虚実とは今のテーブルについている娘さん方は数えて四人いるという現実です そしてそれが赤の他人である私にもはっきりと目で見てわかるという現実です これは相当深刻な病気ですお父さん

佐藤 病気

お医者 そうです この家族のうちの誰かの神経が深く病んでいるんです 何か思い当たることがありませんか

佐藤 思い当たることですか

お医者 なぜこの三人姉妹が一人多いのか思い当たることです どんなに小さなことでもいいんです

佐藤 そんなことがあれば真っ先に先生にお伝えしています 私だつて真実の娘の顔を探しているんです だからこそ神経のお医者さまである先生をお招きしたんです 誰かが病気であるのならきっと私なんですよね 私のせいなんですよね

お医者 お父さんのせいだなんて私まだ断定できません

佐藤 私は先生に私のせいだと断定してほしいんです そうすれば私一人が壁に頭を打ち付けるなり脳天に杭を打ち込むなどして解決するんです

お医者 そんなことしたって神経の病は治りませんよ

佐藤 娘が増えるというのは 恐ろしいですよ先生 ぼんやりと娘のような禍々しい何かが というんじゃないんです 妻と二人で懸命に育ててきた私たちのかわいい宝が 一人増えているんです でもこ

の四人は四人ともかわいい私の娘に違いありませんでも一人増えているんです

お医者 お父さんすみませんお父さん 大丈夫です 私にまかせてください 私はお父さん こう見えてプロです 長いこと人の神経を見つけてもう六年目になりました

佐藤 六年ですか

お医者 ええ

佐藤 短くないですか六年は

お医者 そんなことはない 六年間毎日正月休みだつて返上して人の神経の束だけをじいっとじいっと見続けてきたんです お父さんそんなことができますか

佐藤 私にはできない

お医者 私はしてきました

佐藤 はい

お医者 私はお父さんの味方です

佐藤 はい

お医者 そんなことでも思いつくかぎり言ってもらえませんか 奥さんに隠し子がいませんでしたかお父さんのお兄さんに実は娘さんが一人生まれませんか

佐藤 それは従妹ということですか

お医者 実は三姉妹の中に双子がいてその双子が三つ子だったりしていませんか実はお父さん家を間違えていませんか交通事故で昔娘さんを一人亡くされていませんか

聡子3がまた両手で顔を覆った。声を出さずに泣いた。一瞬の静寂。

聡子1 お父さん

佐藤 うん 先生 少し娘らを落ち着かせて構いませんか

お医者 (配慮がなく) 申し訳ない

聡子2 お茶を入れてきましょう ね

聡子2は聡子3に促す。聡子3は両手で顔を覆ったまま立ち上がった、居間を出ていった。聡子1と聡子2も続いて出ていった。

佐藤 先生すみません 本当に何も心当たりがないんです

お医者 いえ

佐藤 私も少し

お医者 はい

佐藤も出ていった。残ったのはお医者と聡子4だけになった。お医者立ったままだった。聡子4は座ったままだった。聡子4は座って

テーブルかけの模様をじっと見つめたままだった。どこもなく不安げなままだった。

聡子4 先生さすがです

お医者 何がです

聡子4 今仰っていた心当たりというの

お医者 え やっぱり従妹ですか

聡子4 先生が仰ったんですよ 娘が一人亡くなったって

お医者 え 本当ですか

聡子4 私たち 本当は四人姉妹だったんですよ まだお母さんのいた頃 まだみんながずっと幼かった頃

お医者 いつ頃お亡くなりになったんです

聡子4 私が小学三年の時です あの子は小学校にあがりたてだった

お医者 交通事故ですか

聡子4 交通事故です

お医者 お父さん悲しかったでしょう

聡子4 当たり前です 自分の娘ですから

お医者 どうしてその事故のことを言ってくれなかったんでしょう

あ 言えないことだからこんな状況になってるんだろうか

聡子4 トンボの眼つてあるでしょう

お医者 はい え あの 飛んでる トンボ

聡子4 お姉ちゃんたちも私も知っています お父さんにその事故のことを聞くと お父さんトンボの眼になるんですよ 黒目の中にまだたくさん目の眼があつて そのたくさん目の眼の全部に私が映っているんです 私もお姉ちゃんも たちまちバアって細かくなって 飛んでいってしまうんです 跡形もなくなってしまうの 怖いんですよ

聡子4は、ずっと、テーブルかけの模様を眺めている。陽が差して、お医者から見ると、ちょうど聡子4の表情が影になっている。でもお医者、彼女が視線をずらしていないのを知っている。

お医者 あなた方 全部わかってるんじゃないやありません

聡子4はじっとしている。吐く息に、思いつめたものが感じられる。

聡子1 聡子4

居間の隅に、聡子1が立っていた。

聡子4 はい

聡子1 お台所へ行って みんなのお茶の準備を手伝ってくれませんか  
聡子4 はい

聡子4は居間を出る。出たのを見届けて、聡子1はお医者をキッと見つめた。お医者と聡子1にピンと張りつめたものが走る。

聡子1 先生 私わかりました

お医者 なにがです

聡子1 私です 一人多いのは私なんです

お医者 なぜそう思うんです

聡子1 だって私 湯呑みの置いてあるとこ わからなかった

お医者 湯呑み はい

聡子1 私湯呑みがどこにあるのかわからないんです

お医者 それはあなた 長いこと家を出ていたから忘れてしまっただけでしょう

聡子1 そんな五年や十年で自分の家の湯呑みの場所を忘れるなんてことありません

お医者 ありますよ十分考えられます

聡子1 お願いです先生私にしてください

お医者 そんな決められるものでありません

聡子1 先生も何もわかってないんですよ 私手掛かりを見つけたんです 湯呑みです 私がいなくなればすむ話だったんです

お医者 手掛かりならもう見つけました

聡子1 え

お医者 あなた方には昔もう一人妹さんがいましたね

聡子1は身を固めた。

お医者 昔々に交通事故で亡くされてますね妹さんを

聡子1 誰から聞いたんです

お医者 聡子4さんが教えてくれたんです

聡子1 聡子4が 聡子4ちゃんのことを

お医者 え

聡子1 え

お医者 あなた今 聡子4ちゃんと言いませんでしたか

聡子1は両手で口を塞いだ。

お医者 その聡子ちゃんというお名前が亡くなった娘さんのお名前ですか 聡子1聡子2聡子3聡子4とは違う 亡くなった娘さんのお名前が聡子ちゃんなんです

前が聡子ちゃんなんです  
聡子1は居間を出ようとしたが、すでにお医者が塞いでいた。聡子1はどうしたらよいかわからずテーブルの下に潜った。

お医者 なんてそんなに隠すんです これはすごく大事な手掛かりなんです あなたは本当のあなた方に 本当の三人姉妹に戻りたくはないんですか

聡子1 ああこなら安心 安心です もう外のこともなんてなんにも聞かなくていいし様子も全然見えないうわ 安心です

お医者 聡子1さん見えています 右からも見えています左からも見えています 奥からも前から見えています 全然隠れてないですから

聡子1 なんにも聞かなくていいし様子も全然見えないうわ  
お医者もテーブルの下に潜りこんだ。

聡子1 ああなんてはしたくない はしたくないことを

お医者 あなたが何も教えてくれないからでしょう

聡子1 だってそれはもう私がいなくなればすむ話ですから

お医者 私の見立てではそんな簡単な話ではありませんよ

聡子1 え

お医者 先ほど言ったでしょう 真実と虚実を見極めるのだと それはもう単純な数あわせではすまされません 四ひく一で三人姉妹に元通りとはならないんですよ

聡子1 だったらもう 元通りにならなくて構いません みんな私の大事な妹たちなんです

お医者 それはいいけない いいですよ聡子1さん これは病気なんです 異常なことなんです このまま放っておくと背中合わせですんできた真実と虚実とがごちゃ混ぜになってしまう お父さんの脳みそが異次元の彼方へ飛び失せてしまうかもしれない あなた方姉妹のどなたが存在のひずみに耐え切れずに空中爆発を起こすかもしれない

聡子1 それじゃあ私はどうしたら

お医者 とりあえず テーブルから出てくたさい

聡子1はテーブルから出てきた。お医者はテーブルの下に入ったまま。聡子1だけが所在なげに立っている。

聡子1 出ました

先生が出てこない。

聡子1 あの

先生が出てこない。

聡子1 先生

テーブルの下からすすり泣く声が聞こえる。テーブルの下には先生  
しかいない。やがて先生の弱弱しい声が聞こえてきた。

先生 テーブルの下って なんて居心地がいいんだろう

聡子1 はい

先生 昔はよくこうやってテーブルの下で過ごしていたな 夜ご飯を  
作る母親の包丁のどんとんとんという音を聞いたり 妹としりとりを  
したり 聡子1さん私はね

聡子1 はい

先生 こうやって神経のお医者をやって時にはひどく患者さんを傷つ  
けたりもしましたがね 人の子ですよ 家族の絆を引き裂かれるよう  
な痛みというの 全部とまではいなくても少しはわかってるつも  
りですよ ねえ 聡子1さん

聡子1 ここにいますよ

先生 私が悪魔に見えますか

聡子1 見えませんよ

先生 私は私のこと悪魔だと思う

聡子2 聡子1姉さん

聡子2が入ってきていた。

聡子1 どうしたんです

聡子2 聡子3がおかしなことを言うんです

聡子1 おかしなことってなんです

聡子2 一人いなくなればいいのならそれは先生でいいんじゃない  
かって

聡子1 え

テーブルがガタリと動いた。聡子1と聡子2は一斉にテーブルを見  
た。すると、聡子3が二人の合間をぬって入ってきた。

聡子3 だってそうでしょう 私たち四人とお父さんとで何にも気づ  
いてない時は静かだったんです 困らんがあったんです でもお父さ  
んが気づいてしまった 私たちの心にさざ波が立ってしまった お父

さんがお医者先生を呼んで そのお医者先生がこれは病気だと喚きた  
てた 聡子1姉さん

聡子1 なに

聡子3 どこか痛いところがありますか

聡子1 ありません

聡子3 痛いところがないのなら私たちは何が病気なんでしょう

聡子1 でも私たち 心がしくしくと不安なんですよ

聡子3 その不安も あのお医者先生が病気だと喚きたてたからで  
しょう 私に考えがあります

聡子1 なんです

聡子3 先生を殺すの

聡子1は、瞬間、白目になった。

聡子1 ん

聡子3 先生を

聡子1 はい

聡子3 殺すの

聡子1 聡子3

聡子2 聡子1姉さん聞いてあげてください

聡子1 冗談でも人を殺すだなんてやめなさい

聡子3 私は本気

聡子3は後ろ手に握っていた包丁を正面に持ち替えて両手で握る。

聡子1 ひ

聡子3 聡子1姉さん このままいけば お父さんは絶対に聡子ちゃ  
んのことを思い出します あのお医者先生が誘導尋問かなにかしらを  
して お父さんを聡子ちゃんの思い出に仕向けるのです お父さんは

トンプの眼になって 私たち細かくなって 消えるわ

聡子1 そうなる前に先生を追い出せばいいんです

聡子3 聡子1姉さん 人を殺すのは良くないことです そうですね

聡子1 そうですね

聡子3 なぜ人殺しはいけないのか それは法律がそう定めているか  
らです

聡子1 そうですね

聡子3 はい 聡子3 決して

聡子2 聡子1姉さん答えてあげて

聡子1 あの ですから 決して はい

聡子3 でも私たちは今 四人で三人姉妹なのです 私たちはこの世  
界で不安定なのです 法律の遠く及ばないところにいるのです 聡子

2姉さん

聡子2 はい

聡子2は、小躍りつきで、歌いだす。

聡子2 ほうりつの およばないところ ほうりつの およばないと  
ころ

聡子1 聡子2やめなさい

聡子3も加わった。

聡子2、3 ほうりつの およばないところ ほうりつの およばな  
いところ

聡子1 あなたたち どこで練習してきたの

聡子2 聡子1姉さん 私をはじめは戸惑った 私たちはずっと 人  
殺しをしちゃいけない人だった それは法律がそう言っているから  
(遠い目をして)

聡子1 あれあれ聡子2

聡子2 でも私たちは今 四人で三人姉妹 この世界の決め事を超え  
てしまっているのよ この世界から放り出されてしまったのよ 私た  
ちは不安で仕方がなかった この世界で本当に大事なものはなんなの  
か考えた けれど考えるまでもない 私はこの家族が大事 頼りなく  
たって一所懸命に打ち明けてくれるこの聡子3が大事 聡子1姉さん

聡子1 はい

聡子2 あんなに弱虫で泣き虫の聡子3がこんなに立派に成長しまし  
た

聡子1 そうですね

聡子2 私たちはお茶くみなんかししてる時じゃない 今こそ聡子3の  
ために この子のことを認めてあげて

聡子1 人殺しなんて認めちよ あなたたち踊るのやめなさい

聡子3 大丈夫です聡子1姉さん 私が刺します 刺してみせます

その後私ひきこもります 押し入れにでもなんにでもひきこもります  
おむすびを差し入れてください 私一人がいなくなれば世間様では  
私たち立派な三人姉妹です せーの

聡子2、3 ほうりつの およばないところ ほうりつの およばな  
いところ

聡子1 あなたたちその歌やめて

ふいに、聡子3が聡子1に抱きつく。

聡子1 え

聡子3 勇気づけてください

聡子1 聡子3  
聡子3 勇気づけてください

聡子2も、聡子1に抱きつく。

聡子1 あなたたち 勇気いっぱい 勇気いっぱい ゆう…

その時、テーブルがガタリと鳴った。緊張する聡子たち。テーブルの下から、お医者が出てきた。立った。

聡子1 ごめんなさい

お医者は一歩、聡子たちに近づいた。聡子たちは逃げる。

お医者 あ

聡子2 聡子3

聡子3 や は ひれ

お医者 いやあのね

お医者は一歩、聡子たちに近づいた。聡子たちは逃げる。逃げながら、「勇気づけて勇気づけて」「勇気いっぱい勇気いっぱいひゃああ」などと騒ぐ。聡子たちがすぐ逃げるのでお医者もムキになってきた。どんどんぐるぐる追いかける。

お医者 聞いてください

聡子2 聡子3どうしたの

聡子3 包丁は豚肉を切るものよ

聡子2 聡子3

聡子3 包丁は豚肉を切るものよ 人を切るものでないわ

聡子2 この世界を超えていくのではなかったの

お医者 やめなさい

聡子2 あなた弱虫のままがいいの 法律の及ばないところへいくのではないの

お医者 やめなさい

それは、今日一番のお医者のお怒りであった。聡子たちは動けなくなつた。

お医者 聡子2さん 弱虫のままでもいいじゃないですか  
聡子2 この子は昔から 学校へも行けないんです  
お医者 それなら行かなくてもいいんです

聡子2 でも学校へ行かないと怒られるのはこの子なんです  
お医者 お父さんが怖いですか

聡子たちはお医者と目を合わせる事が出来ない。

お医者 これは私の想像ですが あなた方のお父さんは優しい人です  
ね だからもう一人の妹 聡子ちゃんが亡くなった時 ひどく弱ってしまつたんです それでもお母さんのいないあなた方を育てなければならなかった お父さんは無理をされてたんでしょう

聡子1 はい

お医者 あなた方もなんとかお父さんを助けたかった でも時間が経つに連れてお父さんはますますいなくなつた聡子ちゃんのことを思うようになつた 時折幼いままの聡子ちゃんを大人になつたあなた方に重ねるようになった 過去現在未来全部と透かしてトンポの眼になつてしまつた それがたまらなく怖くなつてしまつた そしてあなた方はお父さんから逃げるようにして一人 また一人とこの家から出ていった そうですね

聡子1 はい だいたいあつてます

お医者 そうですか

聡子1 でもだいたいです

お医者 いいんですわ

聡子1 でもだいたいというのは八割九割のそれではなくてそうです  
ね五割六割まあ半々よりちょっとマシかな程度のだいたいなので  
お医者 いいんですわ

そこへ、聡子4が人数分のお茶をお盆に載せて持ってきた。今までの空気にそぐわないその姿勢に、お医者とお聡子1、2、3の視線はくぎ付けになつた。聡子4はしらずと、テーブルにお茶を用意した。

聡子4 お茶の用意が出来ましたよ

お医者 ありがとうございます

聡子4 それと

お医者 はい

聡子4 お父さんの用意も出来ましたよ

居間の入口に、佐藤がその姿を半分だけ現した。

聡子1、2、3 ひ

佐藤 ああどうか怖がらないでくれお前たちお父さんをご覧 ほら  
目を閉じているだろう  
聡子3 お父さん 目を閉じています

佐藤 すみません先生 ちょっとトイレに行つたつもりがなんだか込み入つた話をされていたので私入るタイミングを逸してしまいました

私 全部聞こえてしまいました 先生 聡子のことを思い出しました

娘たちが帰ってきてから今まで なぜ忘れていたのか怖いくらいに聡子のことを鮮明に思い出してしまつたんです でも大丈夫だお前たち 私はずっと目を閉じているから お前たちが私のこのトンポの眼に映ることはない 大丈夫だ

聡子1、2、3 お父さん

聡子4 聡子123姉さん

聡子1、2、3 あ まとめられた

聡子4 聡子123姉さん お父さんは廊下でね 自分の目のことでみんなに迷惑をかけるならって 持っていたボールペンで自分の目を傷つけたんです

聡子1、2、3 お父さん

お医者 なんてことを

聡子4 持っていたボールペンでこうやってこうやって傷つけたんです(ボールペンを出して、両手で端と端を持って目のところでごろごろする)

聡子1、2、3 ひ

お医者 ああ 縦じゃなくて横でこう お父さんそれなら大丈夫です

お父さん あの結構こうなんかごろごろしたでしょう

佐藤 ごろごろしました

お医者 ごろごろしたでしょう

佐藤 先生どんなことでもしますお願いです 娘たちを救つてやってください 私はどうして今ここで怯えている娘たちに寄り添つてやれないんでしょう 何年も昔に死んだはずの聡子の姿ばかりがはっきり見えているんでしょう

お医者 お父さん

佐藤 はい

お医者 わかりました 今から私が30回 聡子ちゃんの名前を呼びます それに耐えられたなら本格的な治療を始めましょう

佐藤 お願いします

お医者 聡子ちゃん

佐藤 うわあ

お医者 聡子ちゃん聡子ちゃん聡子ちゃん聡子ちゃん聡子ちゃん聡子ちゃん…

お医者名前を叫びながら佐藤へ寄っていく。佐藤はたまたま廊下へ逃げ出す。それでもお医者は追っていく。聡子1、2、3はもうじつと見ていられないので、



聡子1 うわ ひゃ あ 先生

お医者 なんです

聡子1 これは ひゃあ 怖い お父さんが先生

お医者 なんです

聡子1 お父さんがしゃしゃこししゃこしないナイフを持っています あれは絶対にしゃしゃこししゃこしないナイフ ひゃあ これはたまりません 危ない ひゃあ

聡子1 はよれよれと、目をまともにあけることが出来ない。

お医者 聡子1さん こちらに来てください

聡子1 え でもそっちにはしゃしゃこししゃこしないナイフが

お医者 そうです聡子1さん このナイフに刺されてください

聡子1 でもそのナイフすごく危なくないですか

お医者 聡子1さん あなたはさっき お父さんや妹さんのために自分がいなくなると仰った

聡子1 そうです でも

お医者 お父さんは今日が見えないんです あなたが近づいてあげないと

聡子1 はい ひ

佐藤 先生

お医者 お父さんは動かないでください

聡子1は、佐藤の差し出したナイフに恐る恐る腹を突き出す。そのまま腹でナイフを押し。

聡子1 あ わ ふ わふわふ わふわふわふわふ わふわふわふわふ わふわふわふわふ

聡子1の腹が、ナイフの柄に触れた。

聡子1 ふぬ

静かに床に倒れる聡子1。

聡子3 聡子1姉さん

お医者 大丈夫です 少し様子を見ましょう

みんなは息をのんで、聡子1を見つめる。しばらく。

お医者 あれ

みんなは一斉にお医者を見る。

お医者 いや 大丈夫です はい あの

お医者 聡子1の傍らにしゃがみ込み、首筋に手をあてる。脈がないことを確かめる。

お医者 おや

佐藤 先生

お医者 はい なるほど 大丈夫です なるほど

お医者は視線を惑わす。思い立ち、置いていたカバンを手に取る。

お医者 なるほど

お医者はそのまま居間を出ようとす。出ようとしたところを聡子3に邪魔された。聡子3は両手で肉切り包丁をしつかと握っている。

お医者 なんです

聡子3 どこ行くんです

お医者 あの あそこです

聡子3 どこです

お医者 病院です

聡子3 なぜです

お医者 はい ほんの少しです

聡子3 ほんの少し なんです

お医者 特殊な 事例が ほんの少しです はい 特殊だから はい 行かないと 調べないと 調べものしないと 病院です

聡子3 姉はどうなったんです

お医者 特殊な事例になりました

聡子3 だから特殊ってなんです

お医者 特殊というのはだからなんであなたは包丁を向けているんです危ないでしょ

聡子3 あなたは 豚肉

お医者 危ないでしょ

聡子3 あなたは 豚肉

お医者 ちょっと待って大丈夫です聡子1さん大丈夫です病院へ行かせてください

聡子3 あなたは お医者 なんです

聡子3 豚肉

お医者 危ないって言ってるだろ

お医者はくるりと向きをかえて逃げる。聡子3はその場に立っている。お医者はテーブルを一周して結局聡子3のところに戻ってきて、またくるりと向きをかえ逃げる。聡子3はその場に立っている。お医者はその間、喚きたてている。

お医者 従妹がいるんだ 従妹がいるんだろ 従妹がいなけりゃなんなんだ なんなんだあなたたちは 偽物がそんなことしちゃだめだろ 本物に 包丁突き立てるなんて危ないだろ

お医者はがむしゃらに居間を出ようとする。聡子3は容赦なくお医者に包丁を突き立てた。お医者はちくりと刺される。軽傷をいい、床に転がるお医者。

お医者 ああ 痛い 痛いよう 刺した 刺したな 手のどこ 手のどこ 痛い 手のどこ 刺した この人手のどこ 痛い

その時、テーブルがものすごい音をたてる。みんな、一瞬何が起こったのかわからない。それは、佐藤が握りこぶしでテーブルを叩いた音だった。お医者も聡子たちも、その場に凍り付き、佐藤を見る。佐藤は、聡子1を見ていた。見ていた、というのは、目を開けていた。聡子1は倒れている。そのことは、目をつむっていた佐藤にもわかっていて。でも、その目で見てしまった。佐藤は動悸が激しくなっている。

佐藤 お前たち なにが起こっているんだ

聡子2 お父さん 目が

佐藤 お姉ちゃんはどうなっているんだ

聡子2 目があいてます

佐藤 先生 この子は大丈夫なんですすよね

お医者 お父さん みんなが私をいじめる

佐藤 お前

佐藤は聡子3を見た。聡子3は包丁を握りしめたまま、佐藤を凝視して動けない。聡子2は聡子3から後じさりしていた。佐藤は、とても優しい、責任感のある声で聡子3に語りかける。

佐藤 何度言ったらわかるんだ 昔から弱虫のくせして そんなもの振り回すなんて口だけだろう お父さんに返しなさい  
聡子3 お父さん トンボの眼

佐藤 お姉ちゃんが大変な時になんてやっているんだ

聡子3 は叫び声と擬音をあげてその場で分裂して小さくなって消えてなくなる。叫び声とは存在が消えてなくなる声である。擬音とはそれを体現した音である。

聡子3 うわあああああポンポンポポンポポンキュッキュ ポン

お医者 なんてことだトンボの眼に見つめられて細かい黒目の中で分裂して小さくなって細かくなってそのコマイのが次々と泡のように消えていくようにしか見えない

聡子2 聡子3

佐藤 お前がちゃんと見ていないからこういうことをするんだらう

聡子2 お父さんごめんなさい

佐藤が一步、聡子2に近づくと、聡子2は逃げていった。居間から出ていった。

佐藤 先生

お医者 はい

佐藤 こんな時にすみません あの子を見てきます

お医者 それは

佐藤 なんです

お医者 いえ

佐藤 お姉ちゃんのこと お願いします

佐藤は居間を出ていく。一人残ったお医者、立ち上がり、ぼんやりと居間を見渡す。夕暮れが終わりを迎えようとしていた。テーブルの下から、それまで動けなかった聡子4が出てきた。

聡子4 ほら 怖いでしょ

お医者 聡子4を見た。夕暮れが彼女の輪郭だけを浮き彫りにして、お化けのように見せた。

聡子4 先生 私はお父さんの妄想なの

お医者 そうです

聡子4 だったら先生が連れだして お父さんでなくて先生の妄想になれば 私この家から出られるのよ

お医者 でも お父さんの病気が治りません

聡子4 私は消えて お父さんは治らなくてはいけ

お医者 そうです

聡子4 どうして病気が治らなくてはいけ

お医者は何も答えなかった。ただ聡子4を見た。とても長い時間が過ぎたように感じたけれど、すべては夕暮れ時の中だけの出来事だった。聡子1が起きた。

聡子1 しゅ 私は伊賀忍者の末裔 しゅしゅ こうやって病気の人の家に忍び込み しゅ あやかしを見せるのが我が使命 しゅしゅ

しかししゅ 誰に言われた使命であるのか しゅしゅ 私には知らない しゅ そして誰も しゅ 私の言う事 しゅ 聞いてくれなしゅ い ぼん は

聡子1も、泡のように消えてゆく。「ぼん ぼん」と言いながら、そのまま居間を出ていく。

聡子4 先生 お父さんが戻ってくるわ

お医者 はい

聡子4 お父さんが戻ってくるのよ

お医者 はい

佐藤が居間の入口に立っていた。聡子4を見ている。聡子4はゆっくり、歌うように消えていった。

聡子4 せんせい ぼん

聡子4 どうして ぼぼん

聡子4 きえなきや いけないの ぼん

おわり

関西の劇団 コトリ会議が金沢で初上演！

2020年8月14日(金)～16日(日)

金沢 21世紀美術館 シアター 21

一般前売：2,700円 (その他割引有り)

主催：コトリ会議

共催：金沢 21世紀美術館 [(公財)金沢芸術創造財団]



詳細はこちら

発行：コトリ会議

上演に関しては [kotorikaigi@gmail.com](mailto:kotorikaigi@gmail.com)

までお問い合わせください。

収録：せんだい短編戯曲賞 2018 (2,000円 + 税)

お求めは、せんだい演劇工房 10-BOX または観劇三昧物販出張所

